

この人に聞く 牧野秀樹さん

## 新しい教職員組合と歩み、 退職後は市民と野党の共同を求めて



【略歴】

- ・1945年、新潟市に生まれる。
- ・1970年、初任 新潟県立吉田商業高校。
- ・1995年から2002年、公立高教組執行委員長に就任。
- ・2006年退職。
- ・事業創造大学院大学でMBA（経営管理修士）を取得。
- ・現在 新潟県平和のための戦争展実行委員会事務局長

編 集 部

I 学んだ頃の様子についてお話しください

### 1 生い立ち

昭和20年（1945年）4月生まれです。8月15日の敗戦の4ヶ月前、3月には東京大空襲があり、沖縄戦も始まっています。

幼稚園に通い始めてから、母が聾啞学校に再就職しました。それまでは、自宅で豚や鶏を飼っていたようです。小学校の教員だった父は、昭和22年12月に病没します。

母子家庭で、3人の子供を大学に出した母は、苦勞人でした。7才上の兄、5才上の姉、私は苦勞知らずの末っ子です。

病没した父は、理科系だったようで、私の名前「秀樹」は湯川秀樹からつけたそうです。ノーベル賞の受賞は1949年ですが、35年に発表した中間子理論を知っていて「この学者は偉くなる」と思ったようです。叔父さんから、小学生時代「おいノーベル、ノーベル」とよく言われた思い出があります。

象牙の塔にはこもらず、湯川博士は、ラッセルIIアインシュタイン宣言に共同宣言者として名前を連ね、

亡くなるまで、核兵器の廃絶に尽力しました。

父は、熱血先生だったようで、沼垂小学校時代の教え子が、月命日29日、毎月我が家に集まっていました。10年以上続いたのではないのでしょうか。

『蒲原まつり』は、村上市の村上大祭、柏崎市の閻魔市とならび『新潟三天高市（たかまち＝縁日）』といわれております。

幼い頃、家の前に屋台が建つわけですが、祭りの翌朝、外へ出た私が「蒲原祭りが、のうなつたー」と泣いて戻ってきたことがあります。ことあるごとに母親に揶揄されたものです。

母は、松ヶ崎浜村（現北区松浜町）の出身で、長岡師範を出て母校の松浜小学校教員を務めました。1930年頃ですね。壺井栄の「二十四の瞳」の主人公、大石先生と同じ世代です。

とくに、この村は戦没者が多かったようです。戦没者の霊園があり、母はお盆には教え子の柱にお参りしていました。同じ形状の柱で、戦没地が彫り込まれています。

42年8月からのガダルカナル島もありますが、43年6月からのサイパンなど戦争後半が多いようです。

敗色濃厚の43年、2月はガダルカナル島撤退、6

月はアッツ島守備隊全滅です。1944年以降の戦没者（軍人・軍属と民間人）は約281万人と推定されています。戦没者310万人の91%です。「国体」を守るとして、戦争終結を遅らせた昭和天皇以下の戦争指導者たちの責任は限りなく重い。日本国、有史以来の大罪です。

まもなく戦後80年、この評価が「スルー」されていることに怒りを覚えます。市民としての力不足も痛感します。

小学校6年生の時、昭和32年（1957年）12月、進学予定の宮浦中学校が体育館を除いて焼失しました。校舎が出来るまで1年生は、長嶺小学校の空きスペースで学ぶことになりました。7学級でした。敗戦の45年度（昭和20年）の生まれは、前後の年代で最小の人数でした。その後、人口が急速に増加し団塊の世代（1947年から1949年生まれ）の直前、「のほほん世代」と言われたようです。

校舎焼失の2年前が、新潟大火でした。1955年10月1日午前2時50分頃。出火元は新潟市医学町一番町にあった新潟県庁舎第三分館で、出火原因は漏電でした。

ちようど日本海を台風22号が通過した直後で、西からの強風により、東方向の新潟市街地へ向けて火の手が広がりました。

県庁（現新潟市役所）から真つ直ぐ北へ伸びる東中通、その一本東の西堀通に延焼。更にその先の古町方面に燃え広がり、小林百貨店（新潟三越）、大和新潟店も炎になめつくされました。

当時、小針の書道教室に通っていたことから、毎週、焼け跡の瓦礫を見ながら万代橋を渡ったことが鮮明です。2つのデパートが新潟市のシンボルで、同じ市内でも周辺からここへ行くことを「新潟へ行く」と、言っていたものです。現在とは隔世の感があります。

中心部は壊滅的な打撃を受けたこの大火で、死者は一人も出なかつたのは、奇跡に近いといわれています。新潟市が本州日本海側最大の都市として大きく発展を遂げていくのは、新潟地震から復興し、上越新幹線、北陸自動車道など高速交通網整備の1980年代後半に入ってからです。

## 2 2年間の浪人時代

その新潟地震です。1964年（昭和39年）6月16

日13時1分、粟島南方沖を震源地とする規模はM7・5。最大級の石油コンビナート災害をもたらした地震で、143基の石油タンクが延焼し、その火災は12日間続きました。幸い、我が家の被害は軽微でした。

地震当時、私は東京の予備校で受講中でした。たまたま、隣が明治大学の学生会館建設中で、土台のくい打ち作業の振動がすくく、地震には全く気がつきませんでした。夕方、市川市の寮に帰ってテレビで知りました。

高校時代は剣道部と放送部の掛け持ちでした。遊んだわけでもありませんが、予備校で全国の高校の受験勉強のレベルを知ることが出来、高校野球と同じく受験でも新潟は後進県、たと思い知らされました。

2年の浪人を経て、第1志望はかなわず「北帰行」よろしく、小樽で学ぶことになります。

商学部だけの単科大学です。前身が1910年（明治43年）に5番目の官立高等商業学校で小林多喜二や伊藤整といった作家を輩出したことなどは、入学後に知りました。

当時は高度成長期で、就職は売り手市場、5つも6つも掛け持ちで就職試験ができ、数社の同時受験で旅

費なども稼ぐことが出来る恵まれた時代でした。

企業の採用内定もいくつかもらいましたが、結果的に商業科の教員となりました。科目の選択で、社会科、英語科の教員免許も可能だったようです。

### 3 学園闘争（紛争）の大学時代

入学は1966年、68年が東大闘争・全共闘運動の時代です。智明寮で生活しました。学寮は学生運動の拠点だったのです。主流派は新左翼の赤ヘル「社学同」でした。言うこととやることがちぐはぐで、体質的に合いませんでした。

自治会の副委員長時代、「立て看板」をよくつくりました。やがて、全共闘によって暴力的に自治会が破壊され、大学も封鎖されました。その後、自治会再建の直前までいったのですが残念です。後日「社会新報」の記者をした封鎖の中心人物は「封鎖しないと格好がつかなかった」と動機を語っています。

アルバイトでは家庭教師の他に、時事通信社の世論調査員として、羊蹄山、後志地方を尋ね、千人以上と面接しています。マルクス・エンゲルス・レーニンの著作もよく学び、苦勞もありましたが、将来の生き方

が方向づけられた学生時代でした。

## II 初任の経緯や現職時代の

様子についてお話しください

### 1 商業科の教員として

現在では燕市になりますが、吉田町にあった吉田商業高校の定時制に商業科の教員として赴任しました。そこで、4年間勤務し、同校の全日制課程に異動し、20年近く勤め、最後は夜間定時制の船江高校でした。

初任は定時制ですので大人びた生徒が指導の対象であり、どのようなやり方で教育に当たるのか、教師像を明確に描けずに苦勞しました。また、生徒たちは昼に仕事をして夕方からの学業ですので、教育に向かう様子が多様で、一人一人を思いやる教育が出来るようになるまで時間がかかりました。

まもなく、「商業教育協議会」の会員になり、商業科の指導の進め方に関して学ぶ機会を得ました。毎年夏の全国集会にも参加しました。商業課程の多様化の時期でもあり、新潟で全国集会を開催することになり、全国から200名を超える参加者があり事務局として大変でしたが良き思い出です。

また、生活指導に関するサークルがあり、そこからも学ぶことが出来て、教員としての力をつけることができました。

また、教員としての人間関係では、教職員組合に加入して様々な活動に取り組み中で鍛えられました。3年目、新潟県高等学校教職員組合（高教組）の青年役員として運動を担いました。さらに、日教組高校部とも関わり視野が広がりました。

この時代、ベビーブームが高校へ、高校増設運動が全国で進み、高校進学率が7割を超える時代でした。教員も増えたのです。組合運動の面では、職場の民主化が大きな課題でした。職場民主化闘争で、組合員が増え、闘争力が高まっていった時代でした。

初任地の、吉田商業高校では全員が組合員でした。職員会議は、管理職の意志に左右されることは無かったです。

生徒と親しく触れ合うことでいえば、クラブ活動の指導が大きいと思います。吉田商業ではバドミントン部を指導することになりました。球技が得意でもなく、指導技術ありませんでした。また、自宅のある新潟市と吉田町の36kmの物理的な隔たりや土・日もないク

ラブ指導には難儀しました。

いま振り返ると、生徒指導などで、生徒や保護者からの視点が、軽視されていなかったか、との反省があります。

例えば、「お宅の生徒はだらしない」「生徒指導はどうなっている」と、地域からの突き上げもあります。ここでも生徒の立場になって指導を進めるか、これまでの積み重ね、慣例重視で進めるのかとの意見対立もありました。真剣な論議をしたものです。

この当時の教職員の異動は、現在とは違って緩やかなものでした。管理職は3〜4年で異動しますが、一般の教職員は同一校で長期間勤務する者が多数でした。生徒指導には、学校独自のカラーが強かったようです。大きな批判にさらされることもなく、ある面では「唯我独尊」だったかもしれません。

## 2 高教組運動の担い手の1人として

1989年、労使協調の「連合」が結成されました。日教組がこの傘下に加わると、反対した各県の教職員組合は、全教（全日本教職員組合）を結成します。新潟でも、高教組は「連合」へ参加します。反対した組

会員は公立高教組を結成し、日本高等学校教職員組合に加盟しました。組合事務所・書記採用など一からの組合づくりで苦労しました。しかし、「教え子を再び戦場に送るな」と意気高く、全国の教職員組合との運動面での交流、教育研究面での高め合いなど運動の質は格段に向上しました。

ただ、主流・反主流の不毛な争いはなくなりましたが、少人数組合のため組合運動を通じての教職員への影響力は小さなものとなりました。

24年11月23日、「八鹿高校事件50年の集い」が、当時の生徒が中心になって開催されました。「解同」(部落解放同盟)数百人が「差別教育糾弾」と、兵庫県立八鹿高校教職員約70人に暴力、多数の重軽傷者を出します(74・11・22)。「解同」による、この暴力・糾弾路線が、組合運動も教育行政も歪めていました。

公立高教組は、全国のたたかいに学び、「同和問題」パンフレットを作成。教職員に広く普及しました。県教委の担当者からも「ありがとうございます」とも言われました。組合の実績であり、存在意義を高めることとなりました。

私は1995年から8年間、この公立高教組の執行

委員長をつとめました。その間、三条高校の「ノーベル賞作家・大江健三郎氏講演会中止問題」が起き、校長の責任を求め「降格・異動」を県教委に要求しました。

2002年10月、創立100周年記念講演会の講師に内定していた大江健三郎さんに対して、当時の笠原校長は私信を送り、大江の講演集を引き合いに「政治的なご発言に少し気がかりを感じ」たとして、配慮を求めました。「校長注文に失望。大江健三郎さん一転辞退」(『新潟日報』02・1・19)

三条が恩師の仏文学者、渡辺一夫ゆかりの地であったことから、当初は講演を快諾していた。講演のテーマは「自立した人間」だった。そこに届いたのが校長からの手紙。自由に話すことができないと判断した結果でした。

この校長に対する要求書をつくる際、当時にいがた県民教育研究所の所長をされていた八木三男さんから多くのアドバイスをいただきました。「ノーベル賞を受賞するということは、世界的な評価が定まっているということだ」。この意見を伺い、ノーベル賞の位置づけに目を開かされました。任命権者の県教委に申し

入れた要求書に、その観点を盛り込みました。翌春、校長は「県教育センター所長」に降格・異動となりました。

今年、被団協がノーベル平和賞を受賞しました。あらためてノーベル賞の持つ日本での影響力を考えさせられました。敗戦後の意気消沈した国民にとって、1949年の湯川秀樹氏のノーベル賞受賞が明るい灯となったときのように。今回のノーベル平和賞受賞が、核兵器廃絶運動の灯となり、核兵器禁止条約への参加を求め、政府を変えていきたいものです。

### Ⅲ 退職後の取組についてお話しください

1 事業創造大学院大学で学ぶ  
規制緩和による新設の大学院で、MBA(経営管理修士)について学ぶことになりました。このライセンス取得が収入増に繋がるものではありませんが、学生として学ぶ立場になりました。MBAプログラムでは、経営戦略、マーケティング、ファイナンス、リーダーシップなどです。

たとえば勤続15年前後に学び直しの機会として制度化されていけば、教わる立場に立ち返ることでの気づ

き、専門教科の深化や教科外の分野のスキルアップになるのでは、と提言したい思いです。

2 町内会長、奈佳美禰神社の氏子役員として地域との関わり

町内や神社の様々な行事を主催する立場から、他の役員の方々や地域住民との横のつながりが出来ました。それは、今でもOBとして総会や懇親会に参加することを通じて継続しています。

### Ⅳ 今後の取組についてお話しください

「市民連合」との関係が出来ました。知事選、参院選挙では選対本部の電話作戦の責任者もやりました。政治には関わりが深いようです。ウクライナやガザ、「台湾有事」など、情勢からは目が離せません。さらに星に輝くレジエンドや知り得た先達に学びながら、平和と戦争を大きなテーマとして、微力を尽くしたいものです。

(文責 編集部)